

Peire Cardenal (III)

— その詩と精神の変遷について —

井上富江

Peire Cardenal(ペイレ・カルデナル)について、これまでPeire Cardenal(I)「アルビ十字軍期の詩⁽¹⁾」の中で、アルビ十字軍とのかゝわりについて述べてきましたし、Peire Cardenal(2)「その詩と精神について⁽²⁾」の中で、南仏の修道士達、とりわけ、シトー修道会、ドミニコ修道会、フランシスコ修道会、及び、苦業会(Sachets)とのかゝわりについて述べてきました。そして今、全詩を通して読む時、初期から、その晩年の詩とその精神は、非常に著しい変遷をとげていることに、改めて驚きの念を禁じ得ません。この小論は、彼の全詩作を通して、その詩と精神の変様に、光をあててみようとした一つの試みなのです。

彼の詩は、Peire Cardenal(I)の中で述べたように、第一期—1200年～1243年、第二期—1244年～1278年に分けられます。それは即ち、彼の詩作が始められたと推定される年から、アルビ十字軍における、フランス軍と、南仏軍との戦いが、Raimon VIIと、Louis IXとの間に結ばれた「ロリスの和平」で、全面的な南仏の敗北という形で、終結されるまでを、第一期、最後のカタリ派の砦であった、モンセギュール(Montségur)が陥ち、210名のカタール達が、火刑に処せられた、1244年から、死亡推定年(1278年)までを第二期としたのでした。

今回この小論発表にあたって、各々、第一期・第二期の話の詳細に検討してみました。その際、R. LAVAUDの分類法に従って、4つのグループに分類してみました⁽⁴⁾。ちなみに ANGLADE は、風刺詩を次の3つに分類しています。

- (1) Sirventes moral—モラルに関する風刺詩
- (2) Sirventes religieux—宗教に関する風刺詩
- (3) Sirventes politique ou personnel—政治的・個人的な風刺詩⁽³⁾

R. LAVAUDは、この分類法を利用していたものと思われます。Peire Cardenalの詩を分類するにあたって、彼は、風刺詩のみに限定されませんので、この3つのグループにもう1つ、愛と女性に関するものをつけ加えたものだと思われます。さて、彼の分類法に従えば、次の4つのグループに分けられることになります。

第一のグループ—Poésie ou satire amoureuse ou féminine

愛もしくは女性に関する詩あるいは風刺詩

第二のグループ—Poésie ou satire à allusions politiques ou personnelles

政治的もしくは、個人的なアリュージョンを含む詩・あるいは風刺詩

第三のグループ—Poésie ou satire religieuse

宗教的な詩・あるいは風刺詩

第三のグループ—Poésie ou satire de morale générale

一般的モラルに関する詩・あるいは風刺詩

この分類法に従って、彼の詩作の第一期・第二期をわけますと、次のように、分けられることになります。その際判別のつかない17編は除きました⁽⁵⁾

グループ	期	第一期	第二期
I		11編	0
II		14編	2編
III		14編	0
IV		18編	20編
合計		57編	22編

この表は、我々に非常に多くのことを語ってくれます。第一期においては、ほぼあらゆるテーマにわたってなされた詩作が、第二期においては、どうして第四のグループに集中してなされるようになったのか。そして又、第二期においては、どうして、第一期の半分にも満たない数（たとえ、判別がつかない17編全てが第二期に属するにしても39編という数は、第一期に比較すれば、非常に少ないものである。）しかなされなかったのか。

その疑問をとくために、更にくわしく年代を追っていくことにしました。この年代設定は、非常にむづかしく、およそ何年から何年までの間としか云えないものが大部分になってしまいますし、又R.LAVAUD⁶⁾と、VOSSLER⁷⁾の研究におうところが多いのですが、両者の説が全く相反するものも数多くありました。その際には、詩の内容あるいは、前後の事件を調べ、両者のうち妥当な方を、師、Camproux 氏に指摘していただきました。この小論にかゝりあう部分の概略を、前後の主要な事件と共に記したものが、次の表になります。

発表推定年	分類	題名	主要事件及び備考
1202年—02年	III	Dels quatre caps	1198年 イノケンチウス3世法王位につく 第4次十字軍
〃	I	Desirat ai	1203年 ピエール・カステルノー、Toulouseの consul達にカトリック信仰を誓わせる
1202年—04年	I	A tota dona	
1204年以後	IV	Lo jorn queu fui natz	
〃	I	S'ieu fos amatz	
1204年—09年	IV	Tostemps azir	1205年 Carcassonne で南仏側カタルと法王 側会談 カステルノー（シトー院長）とそ の補佐役ラウールの権力強まる
〃	IV	Tot m'enuega	
1206年	I	En Peire	1206年 ドミニックこの地にpauvretéを説く
〃	I	Ma donna am	1208年 レモン6世教会より破門さる
1209年以前	IV	Alex andris	1208年 カステルノー ローヌ川にて殺害さる
1209年以後	III	A Dieu grazisc	1209年 アルピ十字軍始まる レモン6世、笞打ちの後、破門許され、 十字軍に加わる
1209年—15年	III	Bona genz, veias	〃 7月 Béziers大虐殺
〃	III	Un sirventes vuelh far	〃 8月 レモン・ロジェ十字軍側に談合に行き、 そのまゝ捕えられる Carcassonneの住民Cité放棄
1212年	II	D'Estève de Belmon	1210年 Cabaret、Minerve、Termesの各城陥落
〃	II	Per fols tens	1211年 Lavaur 包囲、Toulouse 包囲 9月、レモン6世、フォア軍と十字軍合 戦、両軍わける
1212年—13年	II	Un sirventes trametrai	1213年 Muretの会戦 アラゴン王、ペドロ2世戦死

発表推定年	分類	題名	主要事件及び備考
1212年以後	II	L'arcivesques de Narbona	
1213年	II	Un sirventes ai en cor	
1212年以後又は1213年以後	II	Atressi com	
1214年	IV	Razos es	
1215年以後	IV	Tartarassa	1215年6月 レモン6世・レモン7世イギリスへ亡命、十字軍Toulouseへ入る
1215年—24年	III	Tan vei lo segle	
1216年—28年	III	Un estribot	〃 Frères prêcheurs設立
1216年又は19年	II	Falsedatz e desmezura	1216年 イノケンテウス3世死す
1220年—30年	III	Vera Vergena Maria	1217年 レモン7世Marseille上陸 レモン6世Toulouseに入る
1226年	II	Ben volgra, si Dieus	フランシスコ会修道士達の南仏伝道始まる
1226年頃	II	Tot farai una demanda	1218年 Toulouse攻囲中のシモン・ド・モンフォール死す 1222年 フランシスコ修道会の couvent、Toulouseに設立
1228年頃	IV	De sirventes vueilh servir	1223年 レモン6世死す
1229年—30年	III	Clergue si fan pastor	1225年 ブルージュ教会会議でレモン7世は王と教会の敵と宣言さる
1229年以後	IV	Ieu trazi pietz	1226年 ルイ8世十字軍ひきいて Avignon 攻囲
〃	II	L'afar del comte Guio	1229年 教会会議、異端審問の制度始まる
1229年	III	Ab votz d'angel	レモン7世、モーの条約結ぶ 屈辱的条件受け入れ、Parisの公衆の面前で笞刑後赦免
〃	III	Pels clerics es apellatz	
1230年頃	IV	Qui vol aver	1231年 異端審問権は全てドミニコ修道会に託される
1232年—33年	III	Un sirventes novel	
1234年以後	III	Qui volra sirventes auzir	
1235年頃	III	Ben volgra, si far .	1237年 グレゴリウス9世、異端審問停止
1235年—37年	III	Un sirventes fanc en luec	1241年3月 レモン7世、ルイ9世に会見誓約9月モーの条約破棄、グレゴリウス9世死す、異端審問再開 12月 Lavaur で異端多数焼き殺される
〃	II	A totas partz	1242年5月 アヴィニョネの審問官虐殺さる
第二期			1243年 コリスの和平
1248年以後	IV	Tostemps valgra-m	1243年—44年 Montségur 包囲、陥落 1248年 レモン7世死す
1248年以前又は1270年以前	IV	Sitot non ai	1248年—57年 カルデナル、Marseille でくらす
1249年以後	II	Tostemps vir	
1250年以後	IV	Acel que non es aizitz	1250年—57年 シャルル・ダンジュとマルセイユ連合軍の戦い
1250年以後又は1254年以後	IV	Sel que fes	
1250年—60年	IV	Cals aventura	1257年—78年 カルデナル、Montpellier に居を移す。
〃	IV	Tals cuida be	
1250年—78年	IV	Si ves home	
1260年頃	IV	Totz lo babers del segle	
1270年—78年	IV	Amics non es	
1272始め	II	Tendas e traps	
1272年	IV	(カルデナルの作かどうか不明) Totz lo mons es vestitz	

この表によって、我々は、第一期の第一グループに分けられたものが——既に“Peire Cardenal”(I)において述べたように11編しかないのであるが——彼の詩作開始から、実に、6年間の間に、その全てが作られてしまったということ、そして又、第三のグループに属するもののうち、実に10編が1215年から1237年の間に集中して作られていることを知ることができました。この2つのことが、意味することを探ることが、彼の精神の変遷をたどるうえに、非常に大きな役割を、はたすだろうと思います。

既に、みてきた、二つの小論と、少し重複するところがありますが、このことを手がかりに、彼の詩と精神の変遷をたどることにしましょう。

〔青春期〕

彼の詩作への旅立ちを、Miquel de la Tourの古い伝記⁽⁹⁾によってみますと、次のように書かれています。「彼は、良家の出身で、騎士と、その夫人との間に生まれた息子であった。そして彼が、幼い頃、父は、Le Puyの大参事会区の教会参事会員をした。そこで、彼は、学問を学び、本を読むこと、そして歌を歌うことを立派に習得したのであった。しかし、成人に達すると、俗世の空しい事柄に心を奪われてしまった。その理由は、自分が、朗らかで、美男で、しかも若いと感じたからであった。」

(Peire Cardinal) fo filz de cavallier de domna. E cant era petitz, sos paires lo mes per quanorgue en la quanorguia major del Puei; et apres letras, e saup ben lezer e chantar. E quant fo vengutz en estat d'ome, el s'azautet de la vanetat d'aquest mon, quar el se sentit gais e bels e joves.

彼が美男であったかどうかその他の資料がないので定かではありませんが、当時、教会の参事会員になる為には、金貨40エキュが必要であった⁽⁹⁾ことを考えると、その権利を幼い彼の為に買ってやるだけの資力をそなえた家庭で、何不自由なく育てられた青年の映像は、おのずから想像されようというものであります。

こうして「俗世の空しい事柄に心を奪われた」彼は、詩作を始めるわけですが、その初期の段階では、既に述べたように、女性や愛についての詩をつくっています。しかし、その詩は、Bernard de Ventadour⁽¹⁰⁾や、Jaufre Rudel⁽¹¹⁾といった、甘美な恋の喜びや憧憬を歌ったものではありません。いわゆる、伝統的な fin-amor の歌にしては、少々風変わりではありました。1201年から1202年の作といわれる“Desirat ai, enquer desir”のなかでは、次のように歌っています。

Desirat ai, enquer desir
E voil ades mais desirar
Que tener ma dona e baiser
E luec on m'en pogues jausir!
Qu'eu l'am'e dic ço que dir déi.
Anz diran :“Ben vos es esprés”
Si mon joi avía,
Als bons fa piez.⁽¹²⁾

J'ai désiré, je désire encore et je préfère désirer
toujours que de tenir ma dame et la baiser en un lieu
où je pourrais jouir d'elle:……mais dirons:“Vous êtes
bien épris!”

Si(d'elle)je n'avais pas ma joie,C'est qu'aux bons
elle fait pis (elle est plus rigoureuse)

恋人を、我、願ひし、今もなお、
わが手にかきいだき、接吻し、
その場にて、飲びをわかつより、
常に願うことの方こそよかれかし、

彼女を愛し、云うべきことはいわん
“あなたのとりこになった！”と。
もし、我、彼女によりて、歓びを得ずば、
そは彼女の愛のよりきびしき由に！

この詩をみれば、彼が少くともよく云われるような、女性嫌いでも、恋愛恐怖症でもないことはよくわかります。しかし、彼が描く恋愛像は、現実的な官能的な肉欲というよりは、むしろ、理想的な愛への憧憬とでも呼んだ方がいい種類のもののように思われます。彼は、相手の女性にも忠実さを要求しているのです。1204年に書かれたと云われる“Ben teinh per fol”の中には、それが、はっきり記されています。

Ben teinh per fol e per muzart
Cel qu'ab amor se lía,
Quar en amor pren peior part
Aquel que plus s'i fía:
Tals se cuida calfar que s'art.
Los bes d'amor a hom a tart
E-ls mals a cascun día.
Li fol e-l fellon e-l moyssart
Aquil an sa paría:
Per qu'ieu m' en part.

Je tiens vraiment pour fou et pour musard celui qui se lie avec l'amour, car en amour prend pire part celui qui s'y fie davantage: tel croit se chauffer qui se brûle. Les biens d'amour on les a rarement et les maux on les a chaque jour. Les fous, les félons et les faux, ceux-là ont sa bonne amitié: voilà pourquoi je me sépare de lui.

Ja ma mía no mi tenra
Si ieu leis non tenía:
Ni ja de mi non jauzira
S'ieu de leis non jauzía.
Conseilh n'iai pres bon e certa:
E s'ella mi galía
Galiador mi trobara,
E si-m val dreita vía
Jeu l'irai pla.⁽¹³⁾

Jamais ma mie ne me retiendra si je ne la retenais elle-même, et jamais de moi elle ne jouira si je ne jouissais d'elle. J'en ai pris la résolution sage et certaine: je lui ferai selon qu'elle me fera. Et si elle me trompe elle me trouvera trompeur, et si elle va pour moi le droit chemin j'irai pour elle tout droit.

恋にかゝわる人こそ、私には、
気狂いか、のらくら男
のめりこむ程、不幸になるばかり
胸を熱くし、身を焦がす。
愛の幸福めったになく
不幸はそれこそ毎日のように、
狂気と裏切り、虚偽が道づれ。
それで私は、遠ざかる。

もし私が彼女を抱かなければ、
 彼女は決して私を抱くことはない
 もし私が彼女と遊びをわかつことなれば、
 彼女は、決して楽しむことはないだろう。
 私は、賢明な解決策を見出した。
 彼女がする通り、私もしよう。
 彼女が私を欺けば、彼女も私が裏切者と知るだろう
 彼女が貞節つらぬけば、私も彼女に忠実さ。

又、1904年以後の作“S'ieu fos amatz”では、自分がいかに理想的恋人であるか自薦しています。

S'ieu fos amatz o amès
 Eu chantera qualque vès,
 Mas car aisso non í és,
 Eu non sai de que-m chantès.
 Pero en cor èi
 Que, si a Deu plai,
 Questa ves essai
 Consi chantarèi
 De m'amí quan l'aurèi.

Si j'étais aimé ou si j'aimais, je chanterais
 quelquefois, mais puisqu'en moi cela n'est pas, je ne
 sais pas sur quoi je pourrais chanter. Pourtant j'ai en
 fantaisie, s'il plaît à Dieu, d'essayer cette fois
 comment je chanterai sur mon amie quand je l'aurai.

Lo plu fis drutz qu'anc nasquès
 For'eu, sí amia agués,
 ……
 Que qan donpnas an bon près
 Volon qu'om pros prèi
 E fan al savai;
 Lo fals n'a : «la fai» ;
 E-l fis : «lo farai»
 Per qu'eu lor lauzor non èi.⁽¹⁴⁾

Le plus fidèle amant qui naquît jamais, je le serais,
 si j'avais une amie.

Car lorsque les dames ont grande réputation elles
 veulent que l'homme preux prie et elles accordent au
 vil; le fourbe en obtient :“elle le fait” et le loyal:“je le
 ferai”; aussi, moi, n'ai-je pas leur assentiment.

もし、私が、愛されたなら、もし、私が愛したならば
 何度かこんなに歌ったけれど、
 私に、そんなことがおこらないものだから、
 どう歌えばいいか、わからない。
 でも、今回は、神のお気に召すまゝに、
 一つ夢想してみましょう。
 もし私が恋人持ったなら、どんなに愛すか
 歌いましょう

もし、私が恋人持ったなら
 この世に生まれた誰よりもそれこそ忠実
 な恋人でしょう
 ……

でも、しかし、婦人というものの一度評判を
とるとすぐ、男性がいいよのを望み、
安っぽく、すぐ同意を与え、
彼女ペテン師、私じゃ忠実
こんなことごめんさ

女性の忠実さ、貞節さには、露程の信頼もおいていないのがわかります。それに又、女性の方にも、男性を選ぶ際の忠告を与えているのは、本当に、おもしろい事です。1202年から1204年の作といわれる“A tota donna fora sens”には、女性への警告がなされています。

A tota donna fora sèns
Que, enans que prezes, quauzis,
E conogues enans que vis,
E fos enans pros que plazèns.⁽¹⁵⁾

A toute dame ce serait bon sens qu'avnt de
prendre (un ami) elle choisît, et qu'elle
«connût» avant de voir, et qu'elle fût
femme de mérite avant de chercher à
plaire.

ご婦人の皆さんに！恋人を持つ前に選ぶ事、
まず見るよりも識る事を。
気に入られようとする前に、それに値する女に
なるように！そんな良識持ちなさい。

更に1206年“Ma donna am de bona guisa”では、一層批判的な態度になってきています。

Ma donna am de bona guisa
Mas non ges tan qu'en siá fòls.
Ne no voill ges que-m cost.V.sòls⁽¹⁶⁾
我が恋人を、作法のまゝに愛しましょう
でも、気が狂う程じゃない
それに、彼女を征服したからとて、5スーにも値すまいて

J'aime ma dame de bonne manière, mais
non point tant que j'en sois fou ; et je ne
veux point qu'il n'en coûte cinq sols afin
que pour toujours je l'aie conquise.

ここにいたっては、fin-amor に歌われてきた、女性崇拜の優雅さは、少しもなく、あるのはたゞ、女性に対する軽視、もしくは蔑視ともいえる感情のみが露骨にあらわれてきています。“S'ieu fos amatz”に歌われた女性不信は、このような女性感を抱く前段階だったのでしょうか。

Maensacの領主、Hugoとのやりとりの中で、Cardenalの示した冷ややかな態度は、皮肉たっぷり、やりこめられたHugoに同情の念さえ感じる程のものなのです。

En Peire, per mon chantar bèl
Ai de mi dons gans et anèl,
E mant autre n'an atressi
Agut de donnas per lur chan;

(Hugues) : -Seigneur Pierre, par mon beau chant
j'abtiens de ma dame gant et anneau, et maints
autres en ont pareillement reçu de dames, grâce à
leur chant;

Hugo, si vos n'aves joèl,
Autre n'a la curn e la pèl,
E chantas cant el es el ni.
E cant vos enformas son gan,
Autre enforma lo lauri
Dont vos anas brezanejan.⁽¹⁷⁾

(Pierre) -Hugo, si vous en avez un joyau, un autre en
a la chair et la peau. Et vous chantez quand, lui, il
est au nid. Et quand vous rendez forme à son gant,
un autre donne forme à la languette de laurier par
quoi vous allez vous preiant à la pipée.

ペイレ殿、私の美しい歌で、
奥方から手袋と指輪もらったよ。
又別の男達も、その歌で奥方達からご同様さ

ユーゴー殿、おまえさんが手袋もらって
喜こんでいる間に、別の男は、その奥方の
肉体と肌を得てるさ。
おまえさんが歌っている間に彼は、巢ごもり
手袋をいじりまわしている間に、別の男は
栄光に輝き、それでおまえさんパイプでも作るさ
(laurier)

このやりとりを最後に、彼は、二度と婦人と愛に関する詩は、書いていないのです。もっとも、troubadourの常として聴衆の反応を考慮に入れる時、おそらく、婦人も列席したと思われる宮庭で、いつもいつも、このような手きびしい批判のみを聞かされたのでは、おもしろかろうはずもなく、これらの詩が、第一級のものとならなかったのも無理からぬことでありましょう。身を犠牲にして、愛する婦人の為のみに、美しい甘美な愛をさゝやくかれら吟遊詩人の歌を聞きなれた耳に、Peire Cardenalの詩は、本当に、何とか離れ、風変わりだったことでしょうか。又時代を今一度考慮に入れるならば、poésies d'amourを歌うことをその最大の楽しみとし、なかならず「その主題として、吟遊詩人達の歌の中で一番高い価値を与えられたのは、婦人に関する事なのです。⁽¹⁵⁾」といったその隆盛期は、既に12世紀に過ぎ去って、13世紀は、むしろDécadenceの時期であったことも、無関係ではないでしょう。Angladeもその著で、Giraut de Bornelh⁽¹⁶⁾を引用しつつ次のように述べています。「南仏の貴族にとって一番輝かしい時代、それは12世紀でした。それは又、— 少くとも、その後半において — troubadoursの詩にとっても黄金時代でした。…しかし、時代は(12世紀末には既に)荒々しくなって来ていました。いつもあれ程気前がよく、寛大であった大領主達は、厳しく、吝嗇になってきました。彼らは、才能や詩をもはやそれほど厚遇しなくなっていましたし、祭典や、娯楽を少しも喜ばなくなっていました。彼らの趣味は、戦争と略奪になってしまっているのです。⁽²⁰⁾」時代は、Ciraut de Bornelhが、云っている程たとえひどくなかったにしても、確実に前世紀とは変っていたことは確かでした。優雅で上品なfin-amorを歌う程の気持の余裕は、除々に失われつゝあったことも容易に推察することができます。時代は、まさに、アルビ十字軍へむけて、ひたすら走り始めていたのですから…。個人的にPeire Cardenalが、たとえ、amour courtoisに執着していたとしても、彼程度の才能 — こと愛に関する限り — の詩を長々と聞いてくれる宮廷を探すことは、困難であったことが推察されます。

さて青年期を語るにあたって、Peire Cardenal (I)に於いて、少ししか触れていなかったこともあって、その初期の婦人と愛に関する詩に頁をさいてきましたが、『若く美男子で陽気』なCardenalが、Marcabru⁽²¹⁾やGiraut Bornelh程ではないにしても少くとも女性にさほど関心を持つわけでもなく、女性に、自分の幸福を託しているわけでもない、ということは、容易に納得のいくところなのです。

一体彼の関心は、どこにあったのか、彼が人生に何の期待も抱いていなかったとは考えられませんが。彼の最初の詩“Dels quatre caps gue a la cros”の中で語った言葉を今一度、くわしく引用してみましょう。

Cristz mori en la cros per nos

Christ mourut sur la croix pour nous et il détruisit

E destruis nostra mort moren.
E en cros venset l'ergulhos
El leinh on vensía la gen,
Et en cros obret salvamen,
Et en cros renhet e renha,
Et en cros nos volc rezemer,

notre mort en mourant. Et sur la croix il triompha du
Superbe sur le bois même où celui-ci triomphait des
hommes, et sur la croix il fit l'œuvre de salut, et sur
la croix il régna et il règne, et sur la croix il voulut
nous racheter.

Aquest fagz fo maravilhos:
Qu'el leinh on pres mortz naissemen
Nos nasquet vida e perdes
E repaus en loc de tormen;
En cros pot trobar veramen

Ce fait-ci fut merveilleux ; que du bois où mort
prit naissance naquirent pour nous vie et pardon, et
repos au lieu de tourment; sur la croix vraiment peut
trouver tout homme qui consent à l'y chercher le
fruit de l'arbre de science.

Totz homs que querre l'i denha
Lo frug del albre de saber.⁽²²⁾

キリストは、我らの為に、十字に架けられ給えり、
その死によりて、我らの死を消滅し給えり、
十字の上にて、至高を歌い給う
ここに、人類に打ち勝ち給う
霊をお救い下さり
この世をお治め給う
十字の上にて、我らが罪、あがない給う
その行為、いとすばらしき
死した木 生命の木となり
苦しみを、救いと休息に変え給う
その十字の上にて、知の木の果実探したくば
人皆、それを見出さん

婦人と愛の詩には、決して見られなかった、純粹で、素朴な信仰、キリストへの聖らかな讃歌には、一点の曇りも濁りも認められません。皮肉や反感は云うに及ばず、一点の疑心すら見出すことは、できません。彼の神への信仰は、全く、純粹で邪心のないことが、彼の後の聖職者批判への基盤となっていることが充分理解されるのでありましょう。

さて、彼は信仰以外には、何も持たないかという疑問は当然出されるわけですが、もちろん、聖職者として歩くことを拒否した彼には、期するところがあったのでした。1209年までに書かれたであろうと云われる“Alexandris for le plus corquerens”に耳をかたむけてみましょう。

Alexandris for le plus conquerens
E le plus larcs de nostres ansensors,
E Tristantz fon de totz los amadors
Lo plus leals e fes mais d'ardimens,
Etz Ectors fon le meillers, ses
falhensa,
De cavalliers en faz e en parvensa,

Alexandre fut le plus conquérant et le plus
libéral de ceux qui nous ont précédés, et Tristan
fut de tous les amoureux le plus loyal et
accomplit le plus de hardiesses, et Hector fut le
meilleur, sans faute, des chevaliers, par ses actes
et par sa mine, et Gauvain fut le plus courtois en
tous temps, et le plus sage fut le roi Salomon.

E plus cortes Gualvanz totes sazoz,
E plus savis fon le reis Salamos.

Si eu agues aquetz bons fazemens,
Mielz m'estera c'als dos emperadors
Ni als dos reis, sitot an grans onors
Ni gran poder de terras ni d'argens,
Que fora rix de bella captenensa,
Larcx e leials et arditz sas temensa,
Savis e pros, unilz e amoros,
E for'en Dieu servir m'entensios.⁽²³⁾

アレキサンダー大王こそ、我らが先達、第一の征服者
トリスタンこそ、恋人中随一の忠実さと大胆さ
欠くところなきその行為と容貌にて、ヘラクレスこそ騎士随一
何れの時代にてもゴーヴァンこそまず一番の慇懃さ
最も賢き人はと云えば、サロモン王が一番さ
さて、この私、そのすばらしき行いをもってすりゃ、
二人の皇帝や王よりも、
もっと、うまくゆくはずさ
たとえ、彼らに金や封土の名誉があつて、
強大な力があつたとしても
私は品行正しく、自由でかつ忠実で、恐れを知らぬ勇敢さ
賢明でかつ計略に富み、謙遜でかつ愛情深く、
神につかえつゝ、勉ほう程に

Si j'avais, moi, ces bons agissements, il en irait
mieux pour moi que pour les deux empereurs ou
les deux rois, bien qu'ils aient de grands honneurs
et une grande puissance en terres et en sommes d'
argent—car je serais riche en belle conduite,
libéral, loyal, hardi sans crainte, sage et preux,
humble et amoureux, et en servir Dieu serait mon
étude !

まるで、全世界を敵にまわしても、負けない位の自信と、自負心にあふれたこの作品が、何よりもよく彼の人生への目標を若者の熱気をもって我々に語ってくれます。彼は、自信に満ち、希望にあふれていたのです。この詩が、1209年以前に位置づけられることは、表でも明らかなように、1209年、いよいよ、あのいたましいアルピ十字軍が南仏の地を吹き荒れ、彼の上機嫌など、吹きとばしてしまうからなのです。この戦いで、彼の最大の庇護者であった Toulouse 伯が、どういう立場に置かれ、戦いの中で、詩人が、彼の為に、どんなに声を大にして声援を送ったかは、既に Peire Cardenal (I) において、みてきました。Toulouse 伯の意志は彼の意志でもあり、その風刺は実に、鋭く、生き生きとしていました。今ここでは、第二期には、全然とりあげられなくなった第三のグループが、1209年から1237年の間に集中してなされた点にしぼって詩をみていきたいと思ひます。

〔壮年期〕

前掲の表によって、第三のグループのうち、青年期のところでとりあげた“Dels quatre caps”を除けば、そのうち13編が、1209年(アルピ十字軍開始の年)から1237年(グリゴリウス9世、異端審問を停止させた年)までに作られています。

更に、深くつっこんでみれば、13編のうち、実に10編は、1215年以後になされていることが、明らかになります。1215年、これは、Frères précheursが、南仏の地に設立された年だったので。そして、この期につくられた詩21編のうち、10編は、第三のグループに属しているというのは、

実に驚くべきと云わなければなりません。Cardenal をして、そこまで、かりたてたものは、一体何だったのでしょか。

1209年以後の作といわれる“A Dieu grazisc car m’a donat lo sèn”から、みていくことにしましょう。

Qu’ieu puesca dire dels clerges de bèn,
Qu’estar los veich aitan honestamén
Que tota genz los ama e los cré;
Car, a lor ops, son tant de bona fé
Per gran plazer que far e dire,
C’om ten per amor son seinhôr.⁽²⁴⁾

Je rends grâces à Dieu de ce qu’il m’a donné
assez de sens pour que je puisse parler des
clercs en bien, puisque je les vois se conduire si
honnêtement que tout le monde les aime et les
croit; car-dans leur intérêt-ils sont d’aussi
bonne foi, pour une grande obligeance à faire et
à dire, que l’on traite avec amour son seigneur !

神よ、私はあなたに感謝します。

かくも善き司祭様達のことを語れますことをかくも誠実に身を処し給うて、

人々皆が、愛し、信ずる方々のこと。

彼らときたら、こと利益になるとあらばいと誠実にご親切にも、したり云ったり、

まるで人々が領主様愛するのと同じように。

LAVAUDは、この詩を、「この突飛な讃辞は、偽装された satire である⁽²⁵⁾」と述べていますが、まさに、美辞麗句を並べたてながら、絶えることのない民衆の領主への不満を暗示し、“a lor ops” という言葉に最大限の皮肉をこめて、clercs 達への風刺をおこなっていると思われます。しかし、まだ言葉は、強くありませんし、それ程、鋭い風刺にはいたっていません。

1209年から1215年の間につくられた2つの詩には、もう少し、はっきりとした批判になってでてきます。

Bona genz, veias cal vía
Nos va clerzía mostran:
Malvestat e luxuría,
Trafec, barat et engan.
Aquesta decretal an,
On quascuns fort s’estudía.⁽²⁶⁾

Bonne gent, voyez quelle voie le clergé nous va montrant:
méchanceté et luxure, intrigue, fraude et tromperie. Voilà la
décretale qu’ils ont où chacun s’étudie fort.

善き人よ、司祭様がいかなる道を示して下さるか見よ
悪意と淫乱、陰謀と偽瞞、そして裏切り
これら皆、彼らが下した命令で
各々それに狂奔す。

Un sirventes vuelh far dels auls glotós
Que vendon Dieu e destruzon la gén,
Fraire son tug, mas no son pas engals
Las partz qu’ilh fan dels bes de Jhesu Crist.
Ai! verais Dieus, c’ab-ton sanc nos remsist,

Je veux faire un sirventes sur les vifs
gloutons qui vendent Dieu et ruinent le
peulle,
Ils sont tous frères, mais elles ne sont pas
égales, les parts qu’ils font des biens de
Jésus-Christ. Ah! vrai Dieu, qui nous

Veias com es sancta glieiza venals !⁽²⁷⁾

rachetas de ton sang, regarde combien la
sainte église est vénale!

我ここにシルヴェンテスつくろう、あのひどい大食漢めらの為に
奴らときたら、神を売り、民衆を破滅させ…

奴ら皆、frères さ、でも皆が皆、同じじゃない

その幾分かは、キリストの為、善をなしたさ。

あゝ、でも、^{まこと}真の神よ、御血によって、我らをお救い下さった神よ。

見給え、いかに聖なる教会が、金の意のまゝになっているか。

神の名を口にする司祭達が、陰謀と、裏切りに明暮れるこの期、“verais Dieus”と云わなければならなかった Cardenal の痛みは、我々にも理解できます。

この時期に、Estève (彼の事件については、Peire Cardenal (I)においてくわしくふれた) 事件が、おこったことは、彼の怒りを更にあおるものでした。1215年聖ドミニックがこの地に足を踏み入れ、カタールの完徳者達と同じやり方で神を説いて歩いて9年目、Frères Prêcheurs が、この地に設立されたのですが、その修道会に対しても、Cardenal は追求の手を降ろそうとはしません。

Tan vei lo segle cobeitos
Pien de maleza e d'engan,

Je vois le siècle si cupide, plein de méchanceté
et de fausseté,

Tan son li orde envejós,
Plen d'erguelh e de mal talan
Que, per sert, mais sabon d'engan
Que ranbadors ni mals cussos.

Les ordres sont si envieux, pleins d'orgueil et de
mauvaise intention que certainement ils savent plus
de tromperie que larron ou méchant coquin.

E d'aco baston lor maizos
E belz vergiers a l'ombr'estan ;
Mas ges li Turc ni li Persan

Et avec cela ils bâtissent leurs maisons et de
beaux vergers exposés à l'ombre : mais ni les Turcs
ni les Persans ne croiront en Dieu grâce aux
sermons qu'ils leur pourraient faire, car ils ont peur
de passer la mer autant que de mourir et ils aiment
mieux par ici bâtir que là-bas conquérir les pervers.

Non creiran Dieu per lur sermos
Qu'il lur fassan, car paoros
Son de passar con de morir,
E aman mais de sai bastir
Qu'il lai conquerre los fellos.⁽²⁸⁾

この世紀、悪意と虚偽に満ち満ちて、
かくも罪深きを、我見たり

修道会、いとねたみ深く、
高慢ちきで、悪しき意図にみち、
盗賊やごろつき共より裏切り上手、

(かせいだ金で)家建ててござる。
木陰なす、りっぱな果樹園も又。
だがしかし、トルコ人もペルシャ人も
奴らのする誓いなど、誰が信じるものか
奴らときたら、死ぬも同然の海渡ること恐れ、
かしこにて、悪徳の民こらしめるより
ここに家建てる方好む。

彼が何よりも憎んだのは、金に弱く、高利貸まがいの聖職者の姿であったことが、この詩には、よくでていますが、30行目の「海を渡り」の云いまわしは、非常に興味深いものです。身近に行われている、アルビ十字軍には、はっきりと批判的な態度をとっていたことは既に前の小論で明らかにしてきましたが、こと、海を渡った聖地十字軍については、彼は、賛成の態度をとっていることなのです。第7次十字軍か、第8次十字軍の際つくられたとされる“Sitot non ai joi ni plazér”の中に、キリストが生まれた地を、サラセン人達に占められていることへの憤満をうたっていることにも、よくあらわされています。

Aissi-ns laissa Dieus dechazer
Per los falhimens qu'en nos son
Que-ls Sarrazis fa tan valer
Que sobre nos son aurion,
:
E-l sepulcres es del tot oblidatz,
E la terra on Jhesus Cristz fon natz.⁽²⁹⁾

Dieu nous laisse si bien déchoir—à cause des
fautes qui sont en nous—qu'il fait valoir les
Sarrasins au point qu'ils sont au-dessus de nous
comme alériens !

Et le Sépulcre est complètement oublié, ainsi
que la terre où Jésus-Christ fut né.

神が我らを落ちるがまゝに放置し給う
そは、我が内にある悪の為
サラセン人達が、教会の小経机のように我らの上にある限り
神は、サラセン人の方にあり
キリストの墓、すっかり忘れ去られ
その生誕の地も又しかり

この詩自体は、もっと後、第二期に属するものですが、聖地十字軍への彼の態度には、第一期も、第二期も、変わるところはありません。「豪華な装いや供まわり⁽³⁰⁾」にと、どっぷり慣習につかっていた聖職者達を見る度に、彼のいらだちは、高まったものと想像されます。

教会内部の浄化作用は、しかし、既に始まっていたのです。先にふれたドミニックの伝道がその先達でしたが、Frères Prêcheursが設立して、まもなく、フランシスカン達の活動も相前後して、南仏の地に行われるようになるのです。この mendiantsの活動については、Peire Cardenal(II)で既にくわしく述べましたので詳細は省略させていただきますが、13世紀に、Franceと Prorence という2つの教会区が設立されて実に100年もたないうちに、141の町に257の couvents Mendiantsを設立する程⁽³¹⁾の精力的な活動と、滲透ぶりであったことを忘れることはできません。そして、何よりも、その立役者Françoisは“Troubadours de Dieu”⁽³²⁾と呼ばれ、南仏の人々に、親しまれつゝ、雄弁に、かつ効果的に人々をカトリック信仰へとひきもどすことに努めた結果は、次の表⁽³³⁾が何より

も我々にいかにその滲透ぶりが著しかったかということを書いてくれるでしょう。

	couvents設立の地	年号		couvents設立の地	年号
1	Arles	1219	11	Beziers	1238
2	Montpellier	1220	12	Largentière	1239
3	Mirepoix	1220	13	Carcassonne	1240
4	Toulouse	1222	14	Alès	1241
5	Le Puy	1223	15	Albi	1242
6	Lavaur	1226	16	Perpignan	1243
7	Castres	1227	17	Beaucaire	1248
8	Narbonne	1228	18	Nîmes	1248
9	Agde	1236	19	Montauban	vers1250
10	Lodève	1238			

この著しい発展には、先に設立された、ドミニカンとの争いが、付随することは、いうまでもありません。1229年に始まった異端審問の制度が、その権限をドミニカンに託されたことは衆知の事実なのですが、その後にはたした、完璧とも云うべき、もしくは、地獄の審判官にも匹敵しうる、情容赦ない、その審問ぶりは、Cardenalの反感を買うに充分すぎるものがありました。

1229年から37年にかけて、相ついで第IIIのグループに属する詩がつくられたことは、何よりも、その事実をよく裏づけるものと思われます。彼は、いつも、フランシスカンの側にいることは、既に見た通りなのですが、ドミニカンの聖職者への批判は、彼らが、この期間、裁く側に、即、権力を持つ側にいた事が何よりも、Cardenalの怒りの対象となったものと思われます。

まず“Ab vortz d'angel, leng'uesperta, non bléza”に耳をかたむけてみましょう。

Ab prims vestirs, amples, ab capa teza,
 D'un camelin d'estiu, d'invern espes,
 Ab prims caussatz—soltatz a la francesa
 Can fai gran freg—de fin cuer marsehhes,
 Ben ferm liatz per maïstría,
 Car mal liars es grans follía,
 Van prezicant, ab lur sotil saber,
 Qu'en Dieu servir metam cor e aver.⁽³⁴⁾

Avec des vêtements légers et amples, à la
 chape bien étalée, faits de camelot en été et
 épais en hiver, avec de légères chaussures
 —pourvues de semelle à la française quand il
 fait grand froid—en fin cuir marseillais, et bien
 solidement lacées de main de maître, car lacer
 négligemment est grande sottise, ils vont
 prêchant, avec leur subtil savoir, que nous
 mettions à servir Dieu notre coeur et notre
 avoir.

軽い、ゆったりした衣服つけ、
 夏は商人の、冬は厚手の巾広マントつけ
 軽い靴はき—ごく寒い日は
 フランス風の靴底で一上等の
 マルセイユ革、ひもは職人の手で固く結ばれ、それはその
 ぞんざいに結ばれたひもなどほかのこっちゃんというもんさ
 奴ら説教しに行くのさ。
 我々を、その心と持物をどうすりゃ神につかえさせるか
 すっかり知った上のこと。

ぬくぬくと、最上のものを身にまとったbeguinas⁽³⁵⁾ (v.53) の姿には、清貧を標し、原点に返ろうとした、ドミニックの姿は、もはやなく、権威の上にどっかりとすわった、聖職者の姿のみが、描かれる。同じ頃につくられた“Pels clercs es apellatz”には、はっきりと、異端審問への疑問を投げかけています。この時期に、かくも大ぴらに異端審問を批判することが、どんなに危険なことか、Cardenalには、充分、わかっていたはずでした。それにもかゝらず批判せざるを得なかった、Cardenalの、正義感と、anti-conformismeは、後に、第二期に発展する“Sachets”の活動に共鳴するところとなるのでした。

…pellaç herege que
ne jura
…engan e de faussura
…la sainte scriptura
…aidament sans messura
…figlous plain de draitura
:
…ra quella faussa clergia
…deu ne lauergen maria
…et enfaç son pegour
çascun dia
…el que les crey ne que
enlour se fia
…Quid de merce e sença
cortessia

[Par les clercs est] appelé hérétique quiconque ne jure pas selon leur système de tromperie et de fausseté: (et ils tiennent pour rien) (ne font nul cas de) la Sainte Ecriture, (car à toute heure ils mentent) laidement sans mesure (et ils veulent qu'on les trouve) des garçons pleins de droiture.

(Mais je n'écoute) rai (certes pas) ces faux clercs (qui n'honorent ni) Dieu ni la Vierge Marie (et en paroles) et en actions sont pires chaque jour; (et celui) qui les croit et qui en eux se fie (les trouve) vides de pitié et sans acte de courtoisie.

あの clercs 月から
異端よばわりされたって
誰が、虚偽と欺瞞のきまり通り
誓ったりするはずもない
聖書のせの字も守りやせず、
四六時中嘘ばかり
そのくせ公正だと信じさせたがり

奴らは、狂気、高慢、尊大のかたまり
あのローマ教会の指導者めら
キリスト教徒を、欺き、偽り、
奴らの中にいりゃ誰だって
裏切りたくもなるものさ
一週間の7日が7日、悪業ばかり見せてござる。

審問制度そのものを、虚偽と欺瞞と、断定する Cardenal のまわりには、おそらく毎日のように審問の場にすえられ、信念のまゝに死へと旅立っていった無数のカタル達と、それに連座した多くの人々がいたことは、想像に難くありません。ローマ教会＝異端審問＝ドミニコ会修道士、といった

図式は、当然、彼の頭に描かれていたわけですが、「聖書」をその原点におこうとする、彼の青年期の純粹な信仰への態度は、教会の権威とは、無関係のところにおかれていたことは当然のことでした。壮年期に至ったこの期に於いて、その態度は、聖職者の墮落と権威に反して更に純化されていたように思われます。

既にPeire Cardenal(II)に於いて引用した“Vera vergena, Maria”への熱烈な呼びかけもさることながら、“Ben volgra, si far si pogués”において認められる、神との完全な交感とも云える状態は、まさしく、彼の理想とする世界であったように思われます。

Ben volgra, si far si pogués, Je voudrais bien, si cela pouvait se faire, que Dieu
Que Dieus agues tot so qu'ieu ai, eût tout ce que j'ai, et mon souci et mon chagrin, et que
E lo pensament e l'esmai, moi je fusse Dieu comme il l'est. Car je lui ferais
E ieu fos Dieus si con el és; selon qu'il me fait, et je lui rendrais selon que j' ai reçu.
Qu'ieu li fera segon que-m fai,
E-l rendera segon c'ai prés.⁽³⁷⁾

もしそうできるなら神よ、御身に
我が持てるもの全て、その悩みもその悲しみも
持たせたまえ。
そして又我をしてあるがまゝの神となさしめ給え。
御身のなされる通り、しましうほどに
御身のなされた通り、返しましうほどに

神と一身同体を願いつゝ、現実の醜い聖職者達に、目をおっけていることは、Cardenal には、がまんできないことだったのでしょう。しかし、フランシスカンに関する限りそのめざましい発展にもかゝらず彼が批判していないことは既に Peire Cardenal(III)で見えてきましたが、Cardenal が、カタールであったか否かという疑問は、この点からも明らかにされることでした。カタール達にとっては、「現世は、悪の所業」であり、「現世を最大限に阻隔しようとする説⁽³⁸⁾」と、フランシスカン達及び Cardenal のそれとは、大きなへだたりがありますし、現世に何も望まないカタール達と、既に見てきた Cardenal の大きな希望との間には、深い溝があることは、明らかなことです。

〔晩年へ〕

前掲の表によって、晩年、さしも激しかったアルビ十字軍が終了し、南仏をゆるがせ続けたカタール達が、モンセギュールの陥落によって、終焉をつけてからの彼の詩は、22編しかないことになっています。しかもそのうち、第IIグループに属するもののうち、Le Puy でおこった現実の人へのアリュージュとされる“Tostemps vir”を除けば、“Tendas e traps”は、Cardenal の作かどうか判別のつかないものであるというLAVAUDの言葉⁽³⁹⁾を信じれば、彼の第二期の詩は、全て第IVのグループに属することになります。これまでに見てきた通り、第Iのグループは、既に二度と歌われることはありませんし、第IIIのグループも、カタール達が、息の根を止められ、現実に、mendians 達が、そこそこで、説教会をひんぱんに行うようになってからは、Cardenal が出る幕もなくなったと考えるのが妥当かと思われます。更に、アルビ十字軍も1243年の和平と、ルイ9世の治世下に移り、世の中が少しずつ落ちついてきたことによって、政治的に呼びかけなければならない必要もなくなったことが容易に想像できます。必然的に、彼の詩は、第IVのグループに集中されることになりました。すっかり変わったことへの嘆きの声となって……。

この期の Cardenal の詩の中には、明らかにフランシスカンや Sachets の人々の影響が色濃くに

じんできます。“Acel que non es aizitz”は、1250年以後の作と云われていますが、清貧に甘じることへの誇りが、短い詩の中に、あふれ出ています。

Acel que non es aizitz
D'aver, menz d'otra faillénsa,
 Sos rics cors li ditz
Que fassa bon pres garnir,
E sos fins cors li enséinha
Que met' en ric luoc s'amor.
E car lealtatz no-l secor,
 Troba pauc qui lo retéinha,
 E mor cant non pot complir
 Sa conoissénsa.⁽⁴⁰⁾

Celui qui n'est pas pourvu de bien, sans point d'autre
manque, son coeur fier lui dit qu'il fasse (en lui) un
bon mérite se préparer et son coeur sûr lui apprend à
mettre son amour en noble lieu; et parce que la Loyauté
(autrui) ne vient pas à son aide, il ne trouve guère qui
le retienne (près de lui), et il meurt quand il ne peut
accomplir (l'idéal de) sa connaissance.

その他に欠くところなけれど
財をなさざる人よ。
誇らかな心、かの人に云わん。
汝、ながうちに良き価値をなせと。
確かなる心、かの人に教えん。
け高きところにて愛をなせと。
かつての正義は、助けには来ず、めった見られず
その理想なし遂げざれば、
かの人死なん。

清貧に徹することについては既に Peire Cardenal(II)でふれたが、まさしく、mendiants の、理想と、Cardenal のそれは、同一のものでありました。又、charité についても同様のことが云えます。1260年頃の詩“Totz lo sabers del segle”を、今一度引用してみましょう。

(Totz) lo sabers del segle es foudatz ;
E Dieus dis o e trobam o ligen;
Et ieu cre ben sos ditz veraiamen :
Qu'ieu vei que-l ricx es savis apellatz
E-l paupres es fols e caitius clarmatz.
Al ric parec, del segle traspassan,
Et al Lazer, cal mes Dieus en soan.

Tout le savoir du siècle est folie ; Dieu a dit
cela et nous le trouvons à lire ; et je crois bien
ses paroles en vérité : car je vois que le riche est
appele sage et que le pauvre est proclamé fou
et misérable. Mais il parut d'apes le riche
quittant le monde et d'après Lazare, qui des
deux Dieu tint en mépris.

∴
Sel que volra de Dieus esser amatz
Aia en si leial entendemen,
Et ajoste so qu'aura leiamen,
Et fassa ben als paupres dezaizatz,
Qu'el mandamenz nos fon aitals
 donatz.

Celui qui voudra être aimé de Dieu, qu'il ait en
lui-même loyale intention, et qu'il amasse
loyalement ce qu'il possèdera, et qu'il fasse du
bien aux pauvres nécessaires, car le commandement
nous fut donné tel. Et quiconque n'en a pas le
pouvoir ait du moins le désir car notre (bonne)

ヨンによった詩は、このように第二期には、完全に一般的な風俗やモラルへの風刺という形に昇華されたわけです。彼が、一段低い調子で歌う時、それは、いつの時代にも通用する、すばらしい風刺詩へと、高められていったのです。

今1つ、第二期に、どうしてこんなに少ないのであろうかという疑問に、Peire Cardenal は、この期 La Chanson de la Croisade⁽⁴³⁾を書いていたのではないかという説を紹介しておきましょう。6578vers にもおよぶ膨大なこの La Chanson de la Croisade の前半の作者は、Gailhem であるとされています⁽⁴⁴⁾が、その後半の部分は、その作詩法の類似から Peire Cardenal ではないかと考えられています⁽⁴⁵⁾とすれば、この期に、22編しかないということも、説明がつくのですが、これは確かなことではありませんので、何とも云えません。

そして、何よりも、この期に詩が少なくなった理由は、時勢のあまりにも急激な変化に、Cardenal 自身がついていけなくなったことが大きな理由だと思われます。風刺詩は、どの題材を歌うにしろ、非常に鋭い時代と風俗への批評眼を必要としています。言葉を変えていうならば、打てば響く時代感覚が要求される分野だと思われます。にもかゝらず彼は、いたずらに時代の変化を嘆くのみなのです。

そこに彼自身の苦悩もあったのです。

Sitot non ai joi ne plazér Ni delieg dels bes d'aquest món, La rason m'en vir'al volér De chantar; pero non sai dón Poirai penre que mi aón A far sirventes entendén, Tal que non desplass' a la gén, ⁽⁴⁶⁾	Bien que je n'érouve ni joie ni plaisir ni délice d'ò aux biens de ce monde, j'incline ma raison à la volonté de chanter; pourtant je ne sais d'où je pourrai prendre matière qui me profite à faire un sirventès facile à entendre, tel qu'il ne déplaise pas aux gens.
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

私には、喜びも、楽しみもこの世の富による満足も
感じられないけれど
私の心を歌いたいという気にさせたいと思う
でも、(人々の気嫌をそこねないように) 聴きやすいシルヴェンテスを作るのには、
どうすればいいのかわからない

人々の不平不満を迅速に取り入れ、彼らに代って痛快にも、歌いとばす、そんな魅力が、sirventes の大きなよりどころであると思われるのですが、彼は、それを必死に模索しなければならなくなっているのです。気嫌を伺いながら恐る恐る遠慮がちに歌うのでは、sirventes の魅力は半減してしまうでしょう。第二期には、第一期におけるような大きな事件は、おこりませんでした。その上、南仏諸侯の没落は、詩人達の発表の場である宮邸を奪ってしまったのでした。これらの理由が、幾重にも重なって、これ程数が少なくなったと思われます。燃えるような詩への情熱と、はちきれんばかりの若さと希望に満ちた第一期の Cardenal は、皮肉のきつき鋭く、痛快に攻撃をしかけ、一人ずつ片っぱしから槍玉にあげてつっ走っていきました。第二期、彼のまわりの環境がすっかり変わった時、彼は深い冥想と思索に身をまかせたのです。

彼の中に、静かに、ふつつつとたぎる人間愛は、charité と paureté という形をとって詩の中に絶えず、姿をあらわすようになりました。生れながらの正義感と共に、彼は、常に弱者の側に立つ詩人だったのです。

言葉を変えていえば、アルビ十字軍が終るまでの(第一期)Cardenalは、まわりの人々が、その風刺詩を、どう思うかということなど斟酌する必要はなかったのです。生粋の南仏魂を持つ彼は、自身の感じたまゝを歌うことが、とりもなおさず、彼の protecteurs の意志であり希望であったのですから…。

時代が、すっかり変わってしまった時、前の調子で、槍玉にあげていくことは、困難になってしまいました。誰の気嫌もそこねないように願うことは、たとえ、マルセイユとモンペリエのみに暮っていたとしても難かしいことになってしまいました。個人的に名指しで批難することなどとても無理な状況になってしまいました。現体制を批難することも思うにまかせはしません。彼の後だてとなった Raimon VII は、もはやこの世にはいないのですから…。何よりも風俗習慣の違いが、彼をとまどわせてしまったのです。

彼は、強大な権力を持つ者を、又、私欲に走る聖職者を一般的な風刺として歌うことに、その活路を見出していきました。清貧と、charité を歌う詩が、第二期に数多く見られるのは、もっともなことなのです。そしてそれは、人が生きていくための moral を説くことになっていったのです。

註

- (1) Peire Cardenal(I)—アルビ十字軍期の詩について—は、別府大学「紀要」第16号の拙論参照のこと。
- (2) Peire Cardenal(II)—その詩と精神について—は、別府大学「紀要」第19号の拙論。
- (3) J. ANGLADE : *Les troubadours, leurs vies leurs œuvres, leurs influences.*
(Librairie Armand Colin) 1908 p.59.
- (4) R. LAVAUD : *Poésies complètes des troubadours Peire Cardenal* (Privat) 1957, p.p.712-715.
- (5) この第一期、第二期の詩作数については、一、二編、第一期か第二期か判別のつかないものもありました。従って、合計のところは、1又は2の増減を考慮に入れなければなりません。
- (6) R. LAVAUD : op.cit, p.p.717-719.
- (7) Karl VOSSLER : *Peire Cardenal Ein Satiriker aus dem Zeitalter der Albigenserkriege.*
- (8) *Biographie ancienne* par Miquel de la Tour (Slatkine reprints) 1976.
cité par J. Boutière et A. H. Shutz dans les *Biographies des troubadours* (Nizet) 1973 p.335.
- (9) LAVAUD : op. cit, p.611.
- (10) Bernard de Ventadour (environ 1140-1195) 中世のうんだ最もすばらしいtroubadoursの一人。
- (11) Jauffre Rudel (1140-1170) 一度も会ったことのない Tripoli 伯夫人への愛の歌をつくり続け、臨終のまぎわに、その腕にいだかれて死んだ。
- (12) LAVAUD : op. cit, p.24.
- (13) Ibid ; p.10.
- (14) Ibid ; p.16 v.v.1~11, p.18, v.v.31~36.
- (15) Ibid ; p.24 v.v.1~4.
- (16) Ibid ; p.40 v.v.1~3.
- (17) Ibid ; p.30 v.v.1~2.
- (18) Frédéric DIEZ : *La poésie des Troubadours* (Slatkine reprints) 1975, p.p.136-137.
- (19) Giraut de Bornelh (1175-enuiron 1220)
troubadours 達の師と呼ばれた。
- (20) ANGLADE : op. cit, p.p.172-173.
- (21) Marcabru (1140-1185)
彼は、「女性に愛されたこともなければ、愛したこともない。」と公言している。
- (22) LAVAUD ; op. cit, p.p.178-181 v.v.15-28.
- (23) Ibid ; p.544 v.v.1~16.
- (24) Ibid ; p.240 v.v.1~7.

- (25) Ibid ; p.240.
- (26) Ibid ; p.244 v.v.1~6.
- (27) Ibid ; p.228 v.v.1~2, v.v.17~20.
- (28) Ibid ; p.p.200~203 v.v.1~2, v.v.9~11, v.v.25~32.
- (29) Ibid ; p.482 v.v.41~44, v.v.49~50.
- (30) Fernand NIEL : *Albigois et Cathares*(Que sais-je?)
渡辺昌美訳「異端カタリ派」(白水社) 1975 p.77
- (31) *Cahiers de Fanjeux 8 : Mendians en Pays d'Oc* (Privat) 1973 p.29.
- (32) Ibid ; François -Régis Durieux *Approches de l'Histoire Franciscains du Langued'Oc au XIII^e siècle.*
p.79
- (33) Ibid ; p.p.82~83.
- (34) R. LAVAUD : op. cit, p.164 v.v.41~48.
- (35) Ibid ; LAVAUD は、この詩の注釈で、この"beguinas"は dominicains であると指摘する。 p.168
- (36) Ibid ; p.184 v.v.1~5, p.186 v.v.11~15.
- (37) Ibid ; p.242 v.v.1~6.
- (38) NIEL ; 渡辺昌美訳 ;op. cit, p.54
- (39) R. LAVAUD : op. cit, p.126
- (40) Ibid ; p.540 v.v.1~10
- (41) Ibid ; p.524 v.v.1~7, p.528 v.v.29~35
- (42) Ibid ; p.546 v.v.1~8
- (43) *La Chanson de la Croisade* ;この manuscrit は、Paris の Bibliothèque nationale の fond français 25425.
ここでは "*Les Classiques de l'Histoire de France au Moyen Age*" (Belles lettres)中の "*Chanson de la Croisade*"参照。
- (44) J. ANGLADE : *La bataille de Muret d'après la chanson de la croisade* (Privat) 1938 p.15
- (45) Ibid ; ANGLADE は、M. C. Fabre の説を、ここで引用しています。
- (46) R. LAVAUD : p.478 v.v.1~7
本文中の表に記した、事件のうち、アルビ十字軍関係については、Pierre Belperron の *La Croisade contre Les Albigeois et l'Union du Languedoc à la France* と、F. Niel の説に従った。又各修道会・修道士の活動については、*Cahiers de Fanjeux. 8* による。その両者共、André Dupuy の "*Histoire chronologique de la Civilisation Occitane*" T. I (1980)を参考にした。
又、各 troubadours については、注の著作の他に、René NELLI et René LAVAUD 著 "*Les Troubadours*" T.I.(Bib. Euphréenne) (1966)及び、A. JEANROY の "*Les Origines de la Poésie Lyrique en France au Moyen Age*" (Champion) (1969), René NELLI 著 "*Troubadours et Trouvères*" (Hachette) (1979), André BERRY 著 "*Asthologie de la Poésie occitane*" (Stock&Plun) (1979)を参考にした。
なおこの小論は、1980年九州フランス文学会において口答発表したものに加筆したものである。